

新型コロナウイルス感染症流行の回復期の小児科受診対応（7月1日記載）

小石川柳町クリニック

約3ヶ月間続いた東京都の新型コロナウイルス感染症の流行も、ようやく回復期に入りました。このウイルスは、無症状や軽症者から飛沫や接触を介して周囲に広がる性質から、いったん収束したあともどこかに潜伏して次の感染拡大をうかがうものと考えられます。今後、回復期における小児科受診について、以下の対応をお願いします。

1. 風邪症状を呈した場合の受診方針

小児の新型コロナウイルス感染者の割合は低く全体の2%以下とされています。しかし、小児では症状が軽いか無症状が多いため見逃されている可能性があります。小児が感染しやすいかについては、成人と同等、成人の1/3程度など、一定の結論がありません。感染した小児が周囲に感染させやすいかについて、感染させることはあまり無いとされています。小児は感染しても軽症あるいは無症状であることは多くの研究者の一致するところですが、稀に重症化も報告されています。

- ① 新型コロナウイルスの初期症状は通常風邪と同様で、熱、咳、倦怠感などで、嘔吐、下痢や腹痛などの消化器症状も認められます。特異的な症状は無いため、症状からは通常風邪と区別することは不可能です。
- ② 通常風邪と初期の新型コロナウイルス感染症を区別する確実な方法はありません。患者数が少ない場合にはPCR検査もその精度は不十分で、むやみに行えば多くの偽陽性を生みだし、不必要な入院・隔離・生活制限をもたらす弊害が大きくなります。
- ③ 新型コロナウイルス感染症であってもなくても、病初期には特異的な治療法は無く、同じような対症療法が行われます。微熱や軽度の風邪症状に対して、安静、水分・栄養補給、鼻吸引などの補助、解熱剤の適宜使用などによる自宅での療養がまず勧められます。
- ④ 軽症の風邪症状については、直接受診せずに電話による診療（電話初診）を利用して症状を医師に伝え、必要な薬を処方してもらうことをお勧めします。ご自宅近くの希望する薬局で薬を受け取る、あるいは薬の宅配が可能です。

当院でおこなわれる電話初診の詳細は、当ホームページの該当箇所をご参照下さい。

- ⑤ まれに起きる重症化小児への対応が必要です。熱が4～5日以上続く、涙・咳が10日以上続き改善しない、又は一旦改善しかけて再び悪化（再発熱、咳の増大など）、喘息の既往があつて日中も頻繁に咳がでてきた、などは対面の受診を考えるべき徴候です。入院が必要かも知れない中等症以上を疑う症状（呼吸数が早い、肩で息をする、呼吸が苦しい、唇や顔の色が悪い、経口摂取できない、ぐったりしている、など）では、直ちに医療機関に電話連絡し、受診すべきかの相談が必要です。

症状がある場合の登園、登校は、原則として避けるべきです。病児保育室の利用は、感染機会を増やす可能性があります。新型コロナウイルスと他の病原体の混合感染はしばしばあるため、他の感染症検査が陽性であっても新型コロナウイルスを否定することはできません。文京区の病児保育室の7月1日からの受け入れ条件は、「手足口病、ヘルパンギーナ、溶連菌、インフルエンザなどの確定した病名の診断があること」としています。従って、通常の上気道感染症、感染性胃腸炎初期は受け入れてもらえません。

2. 定期的治療を続けている慢性疾患患者の受診方針

小児では、アトピー性皮膚炎、慢性便秘、気管支喘息など、長期に定期受診している患者さんの場合、定期的治療の継続が欠かせません。また、舌下免疫療法維持期のアレルギー性鼻炎のように症状の変化がほとんど認められない場合もあります。これらの慢性疾患では、本来は対面受診を原則としますが、病状が安定していれば電話で状態を医師に報告し（電話再診）、処方箋を受け取ることができます。電話再診の詳細は、当ホームページでご覧になれます。

3. 予防接種・乳幼児健診の受診方針

予防接種・乳幼児健診は、適切な時期に確実に済ませていくことが重要です。このため、当院では感染のリスクをなるべく抑えた環境を整えて、これらを優先的に実施することが重要と考えます。

- ① 月～金午前、月～木午後は、予防接種・乳幼児健診・小児一般（非感染症）と小児一般（感染症）の診療を行います（待合室は分離）。
- ② 金、土午後は、小児一般（感染症、非感染症）と内科の診療です。